

現代ギリシャ語における方言差異について

－素性 [+focus], [+topic] と [+wh] に関連して－

その1

石 岡 精 三*

About Some Dialectal Variations in Modern Greek
in Relation to the Features [+focus], [+topic] and [+wh]

Part 1

Seizo ISHIOKA

Key Words: Focalization, Topicalization, Comma Intonation

0. はじめに⁰⁾

本稿では、以下のスペイン語用例 (1a, b)－(2a, b) の相違を説明する論法が、対応する現代ギリシャ語用例 (3)－(4) に適用可能であることが示される。同時に、現代ギリシャ語の方言用例を適格に説明するため、移動経路理論に基づく新たな論法が提案される。

Focalization の用例である (1) と Wh-Movement の用例である (2) において、「主語＋定動詞」の語順が排除される。対応する現代ギリシャ語用例 (3)－(4) においても、同様の相違が観察される。

(1) (Hernanz & Brucart 1987:p.80)¹⁾

- a.*a SANSÓN Dalila traicionó
SANSÓN－acc Dalila betrayed
- b.a SANSÓN traicionó Dalila
SANSÓN－acc betrayed Dalila
'it is Sansón that Dalila betrayed'

(2) (Toribio 1993:p.128)

- a.*qué el cartero trajo?
what the mailman brought
- b.qué trajo el cartero?
what brought the mailman
'what did the mailman bring?'

- (3) a. *to PETRO i Maria simbathi (Tsimpli 1995:(14b))
 the-acc PETRO the-nom Maria like-3s
 b. to PETRO simbathi i Maria
 the-acc PETRO like-3s the-nom Maria (ibid.:(14a))
 'It is Petro that Maria likes'
- (4) a. *pjon i Maria idhe? (Tsimpli 1995:(49b))
 whom the-nom Maria saw-3s
 b. pjon idhe i Maria?
 whom saw-3s the-nom Maria (ibid.:(49a))
 'whom did Maria see?'

一方で、(1a) と (3a) に対応する Focalization の用例が適格と判断されるスペイン語方言とギリシャ語方言が存在する (*sí que* に関しては後述する)。当該方言において、[+focus] XP の右方における「主語+定動詞」の語順が許容される。

- (5) (Campos 1986:p.154, (99a); (99b))
 a. una CARTA (sí que) María le escribirá a su hermana mañana
 a LETTER (sí que) María her-dat will write to her sister tomorrow
 'it is a letter that María will write to her sister tomorrow'
 b. a su HERMANA (sí que) María le escribirá una carta mañana
 to her SISTER (sí que) María her-dat will write a letter tomorrow
 'it is to her sister that María will write a letter tomorrow'
- (6) (Schneider-Zioga 1994:p.121, (21); Agouraki 1990:(12); Philippaki-Warbuton 1985:(5a))
 a. to MORO o Yorghos frondize
 the-acc BABY the-nom Yorghos cared for-3s
 'it is the baby that Yorghos cared for'
 b. ti NINA i Maria ipe oti tha feri o Yorghos
 the-acc NINA the-nom Maria said-3s that will bring the-nom Yorghos
 'Maria said it is NINA that Yorghos will bring'
 c. ti MARIA o Yanis filise
 the-acc MARIA the-nom Yanis kissed-3s
 'it is Maria that Yanis kissed'

後述するように、(1)–(6) の用例はすべて、拡張された相対的最小原理 (Extended Relativized Minimality (ERM)) によって説明可能である。

更に、以下の相違に留意されたい。(7a,b) において、DO NP (*tin Maria*) の直後に Comma Intonation が生起する必要がない。(8a,b) においては、

当該 NP の直後における Comma Intonation の生起が義務的である。この方言上の差異が、素性 [+topic] の付与プロセスの相違に還元可能であることが示される（具体的には、語彙的に実現されない Root C に対する素性 [+topic] 付与 Strategy の有無が問題となる）。

- (7) (Schneider—Zioga 1994:p.116, (16a);(16b))

a. tin Maria_i o YORGHOS tin_i—aghapa
the—acc Maria the—nom YORGHOS cl—love—3s
'Maria, YORGHOS loves her'

b. tin Maria_i o Yorghos tin_i—AGHAPAI
the—acc Maria the—nom Yorghos cl—LOVE—3s
'Maria, Yorghos LOVES her'

- (8) (Philippaki—Warburton 1985:p.119, (9a);(9b))

a. ti Maria_i o YANIS ti_i—filise
the—acc Maria the—nom YANIS cl—kissed—3s
'Maria, YANIS kissed her'

b. ti Maria_i o Yanis ti_i—FILISE
the—acc Maria the—nom Yanis cl—KISSED—3s
'Maria, Yanis KISSED her'

(9)–(10) で観察されるように、(7) と (8) に対応し、DO NP に対して Focalization が適用された用例では、Subject NP の直後における Comma Intonation の生起が義務的となる（(7) と (8) の挙動を示す方言の双方において）。(9) と (10) における相違は、[+topic] NP (*o Yorghos*) と [+focus] NP (*to Moro*) の移動そのものが排除されることにより説明される（移動経路理論）。(9b) と (10b) は、[+topic] NP が基底生成によって発動する Left—Dislocation (LD) の適用を受けると前提することにより説明される（移動経路理論が関与しない）。

- (9) (Schneider—Zioga 1994:p.121, (21);p.122, (22))

a. *o Yorghos to MORO frondize
b. o Yorghos, to MORO frondize
'it is the baby that Yorghos cared for'

- (10) (Philippaki—Warburton 1985:p.118)

a. *o Yanis ti MARIA filise
b. o Yanis, ti MARIA filise
'it is Maria that Yanis kissed'

本稿は、以下のように構成される。第1節において、現代ギリシャ語の CP 構造と本稿で採用される仮説体系が提示される（スペイン語とギリシャ語に対して同一の CP 構造が想定される）。第2節では（3）と（4）の用例に検討が加えられる。更に、（6）の適格性を説明する論法が提示される。第3節において、素性 [+topic] 付与に関する方言上の差異が検討され、（7）と（8）の相違が説明される。第4節では、（9a）と（10a）の非文性を説明すると考えられる移動経路理論が示される。第5節において、[+focus] XP, [+wh] XP と [+topic] XP が S 移動する用例が検討される。第6節では、LF 移動が適用されると考えられる用例に検討が加えられる。第7節は結語を構成し、問題点とそれに対する打開策が提示される。

1. 現代ギリシャ語の CP 構造と定義・仮説体系

現代ギリシャ語 (Modern Greek (MG)) の CP 構造として以下の (11) が想定される。これは、石岡 (1996a) がスペイン語に対して想定する CP 構造に類似するものである。以下に、石岡 (1996a) の概要を示す。

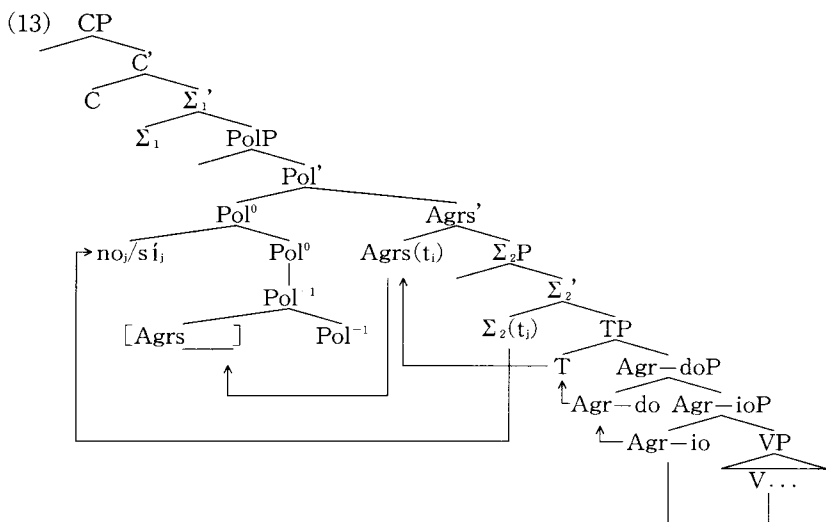
- (11) [CP [Σ₁' [PolP [Agrs' [Σ₂P [TP [Agr-doP [Agr-ioP [VP]]]]]]]]] 2)

スペイン語の Agrs は、[+lexical] と指定される。よって、Agrs' がその最大投射を構成する (Contreras 1991)。同様に、Σ₁ も [+lexical] と指定される。構造 (11) は、以下の用例から導出される。3)

- (12) a. MARTA *sí que nunca se acuesta tarde* (Campos 1986:p.169, (128a))
 MARTA *sí que* never go-3s to bed late
 'MARTA never goes to bed late'
 b. MARTA *sí que no vendrá a la fiesta* (ibid.:p.168, (123))
 MARTA *sí que* not will come-3s to the party
 'MARTA will not come to the party'
 c. *MARTA *no sí que vendrá a la fiesta*
 MARTA not *sí que* will come-3s to the party
 'MARTA will not come to the party'
 d. MARTA *sí que sí trabaja mucho* (ibid.:p.168, (126))
 MARTA *sí que* yes work-3s a lot
 'MARTA does work a lot'
 e. sé que MARTA *sí que nunca se acuesta tarde*
 know-1s that MARTA *sí que* never go-3s to bed late
 'I know that MARTA never goes to bed late'

(12a-d) は, Pol の上位位置に [+focus] 要素を導入するゼロ範疇 (*σί que*) の存在を示す (このゼロ範疇を Σ_1 と呼ぶ)。(12a, d) はまた, Σ_1 と Pol が相異なるゼロ範疇であることを示す。(12e) により, Focus Marker (*σί que*) が生起する Σ_1 が, C よりも下位に位置する範疇であると判明する。

Laka (1990, 93) は, Marker (*σί, no*) が Pol (Laka の Σ) 位置に生成されると考える (これらの Marker は, 基底生成された位置から移動することはないと想定される)。本稿では, 当該 Marker が基底生成される位置と S 移動において生起する位置が異なると前提する (cf. Zanuttini 1994)。具体的に, 以下の CP 構造 (13) を想定する。Marker (*σί, no*) は Σ_2 の位置に基底生成されると考える。



V が Agr-io, Agr-do と T を経由して Agrs 位置へ移動することにより, 定動詞が形成される (移動要素が Marker (*σί, no*) が生成される Σ_2 を経由しない点に留意されたい)。Pol (Pol⁻¹) は, 定動詞形態が生成される Agrs の複合体を選択すると考える (よって, 定動詞は Pol の Selected Slot (SS) 位置へ移動する)。この場合, T から Agrs への主要部移動が問題となる。この移動が主要部移動の規制 (Head Movement Constraint (HMC)) に違反すると思われる。

この問題は, Σ_2 に生成される Marker が Pol⁰ に左方付加した位置へ移動

することにより打開されるであろう (Belletti 1990a, b)。それは、定動詞がその SS 位置へ移動している Pol と、Marker の付加移動を受ける Pol が同一連鎖の HEAD を構成するためである。^{4) 5)}

石岡 (1996a) と同様、Rizzi (1990) で提唱される Relativized Minimality が (14) のように拡張される。

(14) Extended Relativized Minimality (ERM): ⁶⁾

X antecedent—governs Y iff there is no Z, Z (X^0 , A—Specifier, A'—Specifier, and Adjunct which is strictly adjacent to and in the same adjunction direction as X) such that

- (a) Z is a typical potential antecedent—governor for Y, and
- (b) Z c—commands Y and does not c—command X.

それでは、上のスペイン語用例 (1)–(2) はどのように説明されるであろうか。最初に、Contreras (1991) の論法を検討する。Focalization の用例である (1a, b) に対して構造 (15a, b) が想定される。(15a) において、主語 NP (*Dalila*) は、Agrs' に左方付加した位置へ移動する。[+focus] NP (*a Sansón*) は、Agrs' に左方付加した位置を経由して移動する。(15b) において、主語 NP は、それが基底生成された位置にとどまる ([+focus] NP のみが Agrs' に左方付加した位置を経由して移動する)。

- (15) a. [_{Agrs'} a SANSÓN_i [_{Agrs'} Dalila [_{Agrs'} [_{Agrs'} quiere]<sub>[TP [_{VP} t_i]]]]]]
 b. [_{Agrs'} a SANSÓN_i [_{Agrs'} [_{Agr} quiere]_{[TP [_{VP} Dalila t_i]]]]]}</sub>

Agrs' に左方付加した位置にある [+focus] NP_i はその痕跡 (t_i) を先行詞統率しない。それは、同じく Agrs' に左方付加した位置にある主語 NP (*Dalila*) が Potential Antecedent—Governor (ERM Barrier) を構成するためである。結果として、(15a) の派生は、ECP (空範罅原理) によって排除されることになる。(15b) の派生では、ECP 違反が惹起しない。

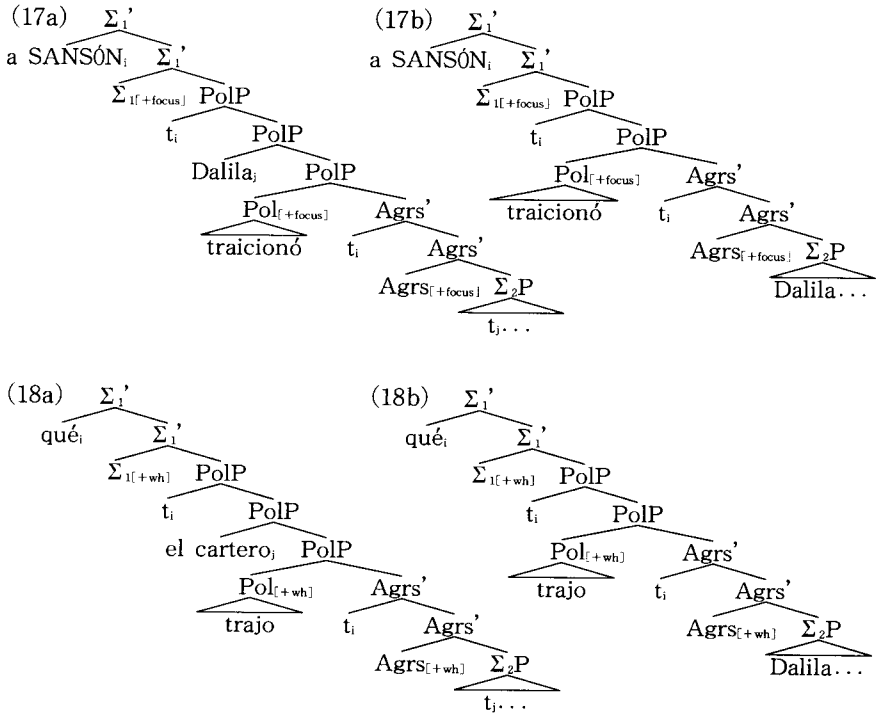
しかしながら、Contreras (1991) は、[+focus] 要素が Agrs' に左方付加した位置に移動、あるいは当該位置を経由する必然性について言及していない。[+focus] 要素が特定位置 (例えば Agrs' に左方付加した位置) を経由する引き金 (Trigger) を明示化し、同時に [+wh] 要素移動の用例をも説明するため、以下の仮説 (16) を設定する。

(16) Hypothesis:

Σ_1 , assigned the feature $([+wh] \text{ or } [+focus])$, obligatorily transmits/percolates the feature involved successively down to Agr at D-structure.

素性 $([+wh] \text{ あるいは } [+focus])$ は, Σ_1 に付与される。 Σ_1 に付与された素性は, Pol を経由して Agrs まで受け継がれる (下方浸透する)。当該素性もつ最大投射は, 同じ素性を付与・伝達されたゼロ範疇である Pol と Agrs の最大投射に左方付加した位置 (Checking Domain) を経由して, その最終着地点と同定される Σ_1 の Checking Domain (Σ_1 に左方付加した位置) へ移動する。^{7) 8)}

結果として, (1a, b) と (2a, b) に対して, それぞれ (17a, b) と (18a, b) が想定されることになる。



主語 NP (*Dalila, el cartero*) は Topicalization の適用を受け, PolP に左方付加した位置へ移動する (定動詞は, Pol 位置に生起する)。(17a) と (18a) において, 当該主語 NP が ERM Barrier を構成する。よって, PolP に左方付加した位置にある中間痕跡 (t_i) は, Agrs' に左方付加した位置にある痕跡 (t_i) 先行詞統率することはない。つまり, (17a) と (18a) の派生構造は, ECP (ERM) によって排除されることになる。(17b) と (18b) では, このような ECP 違反が観察されない。⁹⁾

2. MG における Focalization と Wh-Movement

MG の用例 (3)–(4) は, 対応するスペイン語用例に対する論法により説明可能である。(3a) と (4a) は, ECP (ERM) によって排除される。つまり, Topicalization の適用により PolP あるいは Σ_1' に左方付加した位置へ移動した主語 NP (*i Maria*) が ERM Barrier を構成するため, 先行詞統率が満たされない。もう一方の派生においても, PolP に左方付加した位置にある [+focus] NP (*to Petro*), あるいは [+wh] 要素 (*pjon*) の中間痕跡が ERM Barrier を構成するため, 主語 NP (*i Maria*) の PolP に左方付加した位置への移動が排除される (先行詞統率違反)。(3b) と (4b) では, このような違反が観察されない。

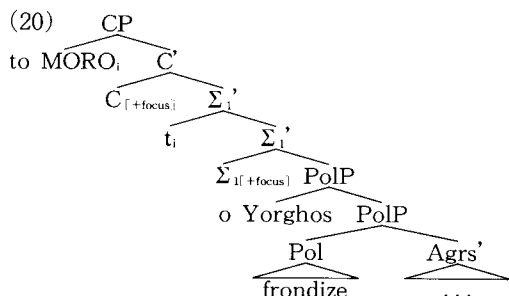
しかしながら, MG の用例 (3a, b) と (4a, b) の相違を説明する論法は, (6a–c) を不適格と予測する。Alexiadou (p.c.) と Schneider–Zioga (1994) も指摘するように, (3) と (6) は異なる方言の用例と考えられる。(6a–c) の適格性は, Σ_1 に付与される素性 [+focus] の下方浸透だけでなく, 当該素性が直接上位にある C へ上昇浸透する方言を想定することにより説明される (Root Context において)。後述するように, Embd. Context においても, Σ_1 に付与される素性 [+focus] の上昇浸透が確認される。具体的に, 以下の仮説を設定する。¹⁰⁾

(19) Hypothesis:

In a certain dialectal group, the feature [+focus] assigned to Σ_1 may percolate up to C in root contexts.

この仮説により, (6a–c) が適格と予測されることになる。例えば (6a) に対して, 以下の構造 (20) が想定される (この派生は, ECP (ERM) の要請を満たす)。主語 NP (*o Yorghos*) は, PolP に左方付加した位置へ移動する。

[+focus] NP (*to moro*) は, Σ_1 の Checking Domain を経由して Spec(C) へ移動する。¹¹⁾



3. Comma Intonation (CI) の生起と素性 [+topic] の付与

本稿では, LD の適用を受け CP に左方付加した位置に基底生成される要素の直後における CI の生起が義務的と想定する (RD の適用により CP に右方付加した位置に生成される要素の直前にも CI が生起する)。LD (RD) の場合を除き, その前後に CI を随伴しない要素は, それが本来基底生成された位置にあるか, Topicalization の適用を受けると考える (素性 [+topic] は, 単一のゼロ範疇に付与される)。¹²⁾

最初に, (8a) に検討を加える。[+focus] NP (*o Yanis*) は, Agrs と Pol の Checking Domain を経由して, Σ'_1 に左方付加した位置へ移動する。[+topic] NP (*ti Maria*) が [+focus] NP (*o Yanis*) の左方に生起するため, 当該 [+topic] NP が Σ'_1 に左方付加した位置へ移動する。明らかに, この移動は ECP (ERM) によって排除される。結果として, DO NP (*ti Maria*) が CP に左方付加した位置に基底生成されることになる。

(8b) における定動詞は, Contrastive Focus Stress を付与される。この場合, 定動詞は Pol から Σ_1 位置へ移動する。つまり, 素性 [+topic] が Σ_1 に付与されると考えられる。複数の [+topic] NP が Σ'_1 に左方付加した位置へ移動するこの移動は, ECP によって排除される。結果として, 一方の [+topic] 要素に対して LD が適用された派生が適格と予測される。¹³⁾

(8a, b) における CI の生起を説明する論法は, (7a, b) を不適格と予測する。(7a, b) において, [+focus] NP の直後に CI が生起しない (生起する必要がない)。この問題は, 素性 [+topic] が付与されるゼロ範疇をパラメー

ター化することにより打開可能である。具体的に、語彙的に実現されない Root C に対する素性 [+topic] 付与が許容される方言が存在する（これを Parameter-B と呼ぶ）。

(7a, b) は, [+Parameter-B] の方言用例である ((8a, b) は, [-Parameter-B] の方言用例と考えられる)。例えば (7a) において, [+focus] NP (*o Yorghos*) は Agrs と Pol の Checking Domain を経由して, Σ_1' に左方付加した位置へ移動する。[+topic] NP (*tin Maria*) は, Spec(C) 位置へ移動する。この移動は, ERM の要請を満たすと考えられる（適格と判断される）。

(7b) はどのように説明されるか。定動詞に対して Contrastive Focus Stress が付与される派生では, 当該定動詞が Σ_1 に生起する。素性 [+topic] が Σ_1 に付与される派生は, ECP (ERM) によって排除される (Σ_1' に左方付加した位置へ複数の [+topic] NP が移動する)。よって, 素性 [+topic] が C に付与されることになる。ここで, 問題が惹起する。[+topic] NP (*o Yorghos*) は Spec(C) 位置へ移動する。一方の [+topic] NP (*tin Maria*) の移動先が問題となる。当該 NP が CP に左方付加した位置へ移動する派生は ERM を満たすが, [+topic] NP (*tin Maria*) の直後に CI が生起することになる。また, この可能性は, LD によって, つまり基底生成の Strategy によって実現される (C に付加した位置への移動による Topicalization が存在しないと考える)。

(7b) において, [+topic] NP (*tin Maria*) はどの位置へ移動するのか。本稿では, Spec(C) 位置にある [+topic] NP (*o Yorghos*) それ自体に左方付加した位置へ移動すると想定する。これは, LF における演算子合併 (Absorption) に類似する移動である。¹⁴⁾

このように, (7b) の適格性は, [Parameter-B] と 演算子合併に類似する移動形式 (S-Absorption) を想定することにより説明可能となる(第4節において, (7b) に対応し, [+topic] NP の位置関係が逆転した用例に関する予測が検討される)。¹⁵⁾

4. 移動経路理論 (Path Containment Theory (PCT))

これまで設定された本稿の仮説群は, (10a, b) の相違を適格に説明する ((10) が ([+Parameter-A], [-Parameter-B]) に属する点に留意されたい)。(10a) において, Σ_1 に付与された素性 [+focus] が下方浸透する場

合、素性 [+topic] が同じ Σ_1 に付与される派生は ERM によって排除される。素性 [+focus] が上昇浸透する場合、[+focus] NP (*ti Maria*) は Spec(C) へ移動する。当該用例が [-Parameter-B] に属するため、C に対する素性 [+topic] 付与が排除される。よって、素性 [+focus] が下方浸透する場合の派生は、生成不能となる。結果として、主語 NP (*o Yanis*) に LD が適用された (10b) が生成されることになる。

([+Parameter-A], [+Parameter-B]) である (9a) は問題を惹起する ((9b) は、主語 NP (*o Yorghos*) に LD が適用された用例として説明される)。(9a) が適格と予測されることになる。素性 [+topic] が Σ_1 に付与される派生は、ERM によって排除される。素性 [+topic] が C に付与され、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が下方浸透する場合の派生は、ERM を満たす ([+focus] NP (*to moro*) が Σ_1' に左方付加した位置へ移動している)。素性 [+focus] の上昇浸透が発動した場合、[+focus] NP は Spec(C) へ移動する。[+focus] 要素が Spec(C) 位置に生起する [+focus] NP (*to moro*) それ自体に左方付加した位置へ移動する派生を排除する要因が存在しないと思われる。

類似する問題は、以下の (21a, b) においても観察される。

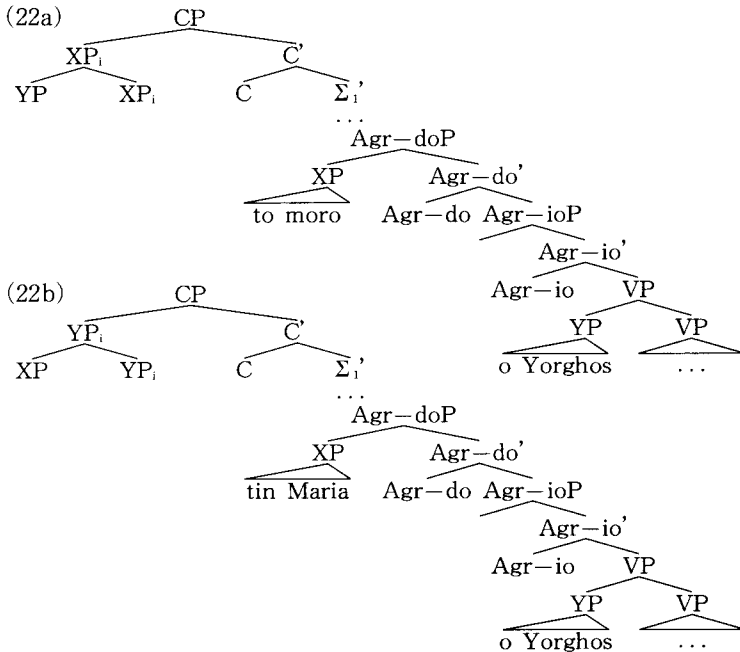
- (21) (Schneider-Zioga 1994:p.141, (49); p.147, fn. (19))
 a. **o Yorghos to moro_i to_i-FRONDIZE*
 b. *o Yorghos, to moro_i to_i-FRONDIZE*
 '(speaking of) the baby, Yorghos CARED FOR it'
 c. *tin Maria_i o Yorghos tin_i-AGHAPAI* (Schneider-Zioga 1994:p.116, (16b))
 'Maria, Yorghos LOVES her'

Subject NP と DO NP の直接連続が排除される ([+topic] Subject NP の直後に CI が生起する必要がある)。不適格と判断される (21a) は、適格と判断される (7b) の好対照をなす (後者を (21c) として再掲する)。

最初に、上の (21a, c) の相違を説明すると考えられる論法を提示する。Subject NP と DO NP の移動経路が重要な役割を果たすと考えられる。素性 ([+focus], [+wh] あるいは [+topic]) を付与された DO NP と IO NP は、それぞれ Spec(Agr-do) と Spec(Agr-io) 位置へ移動する (ϕ -Feature と Case に関する Checking)。次いで、DO NP と IO NP はそれぞれに付与された素性 (例えば [+topic]) に関する Checking のため、当該素性の Checking Domain へ移動する。

そこで、素性 ([+focus], [+wh] あるいは [+topic]) の Checking に関する移動の始発点として、それぞれ Spec(Agr-do) と Spec(Agr-io) を想定することにする。現代ギリシャ語における主語 NP は、それが基底生成された位置 (VP に左方(あるいは右方) 付加した位置) において ϕ -Feature と Case を付与されると想定する。¹⁶⁾

(21a) と (21c) のそれぞれの派生構造として、以下の (22a, b) を想定する。(22a) において, [+topic] DO NP (*to moro*) の移動経路 (Agr-doP \rightarrow TP $\rightarrow \Sigma_2$ P \rightarrow Agrs' \rightarrow PolP $\rightarrow \Sigma_1'$ \rightarrow CP) は [+topic] Subject NP (*o Yorghos*) の移動経路 (Agr-ioP \rightarrow Agr-doP \rightarrow TP $\rightarrow \Sigma_2$ P \rightarrow Agrs' \rightarrow PolP $\rightarrow \Sigma_1'$ \rightarrow CP \rightarrow XP_i) に完全包含される。



(22b) において, [+topic] DO NP (*tin Maria*) の移動経路 (Agr-doP \rightarrow TP $\rightarrow \Sigma_2$ P \rightarrow Agrs' \rightarrow PolP $\rightarrow \Sigma_1'$ \rightarrow CP \rightarrow YP_i) は, [+topic] Subject NP の移動経路 (Agr-ioP \rightarrow Agr-doP \rightarrow TP $\rightarrow \Sigma_2$ P \rightarrow Agrs' \rightarrow PolP $\rightarrow \Sigma_1'$ \rightarrow CP) と完全包含関係にない。

ここで、以下の仮説 (23)–(24) を想定する。仮説 (23) は、(22a) を不適格と予測する。¹⁷⁾

(23) Hypothesis (Path Containment Theory (PCT)):

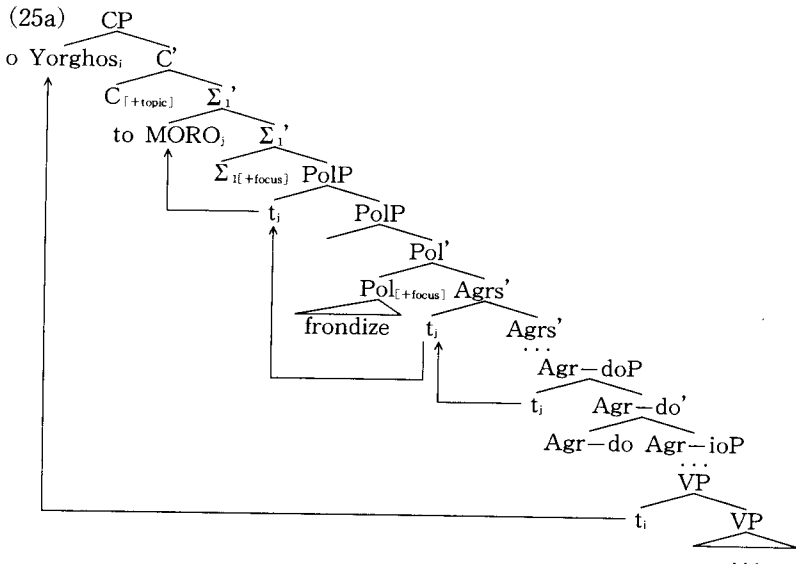
The derivation, in which the path (or UNION) of one moving element is wholly contained in that of the other moving element, is rejected.

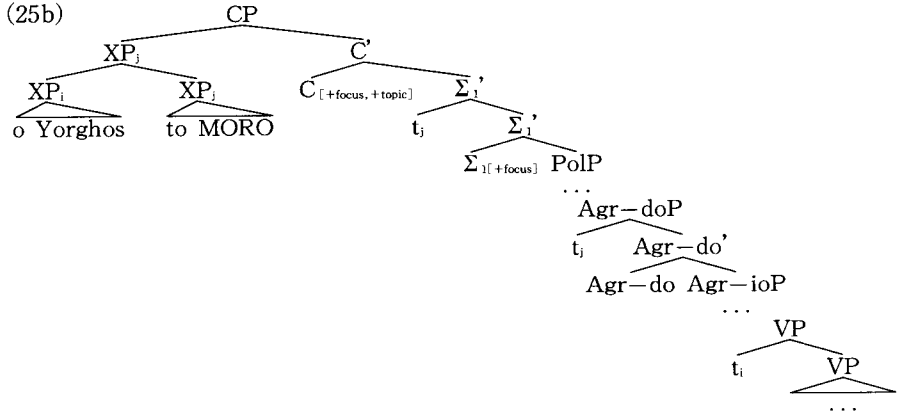
(24) Hypothesis (formation of UNION)

With respect to some feature ($[+focus]$ or $[+wh]$), each intermediate path of an element bearing the feature involved forms UNION iff the element is the only one that moves to its final checking domain.

(24) は、最終移動において素性 $[+focus]$ あるいは $[+wh]$ に関する Checking の適用を受ける要素が単一である場合、その中間移動経路全体が 1 つの経路 (UNION) を形成することを規定したものである (これは、移動経路理論の観点から見た例えば (7a, b) の適格性と (9a, b) の相違をを説明するため必要となる)。

(9a) の検討に立ち戻る。(9a) に対して、以下の (25a, b) の派生構造が想定される。(25a) は素性 $[+topic]$ が C に付与され、 Σ_1 に付与された素性 $[+focus]$ が下方浸透する派生である。 $[+focus]$ NP (*to moro*) の移動経路 (UNION) が $[+topic]$ NP (*o Yorghos*) の移動経路に完全包含される (結果として、(25a) が不適格と予測される)。



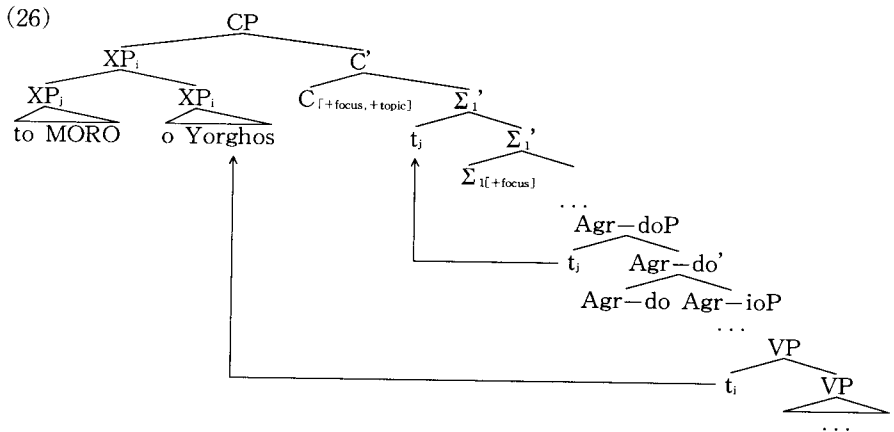


(25b) は、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が上昇浸透する場合の派生である（素性 [+topic] は C に付与される）。よって、移動する両要素が同一の Checking Domain へ移動する（UNION が形成されない）。結果として、[+focus] NP (*to moro*) のすべての中間移動経路が [+topic] NP (*o Yorghos*) の移動経路に完全包含される（(25b) が不適格と予測される）。

結果として、[+topic] NP (*o Yorghos*) に対して Topicalization が適用された派生が PCT によって排除されることになる。残る可能性として、当該 [+topic] 要素 に対して LD が適用された派生 (9b) が指定される。

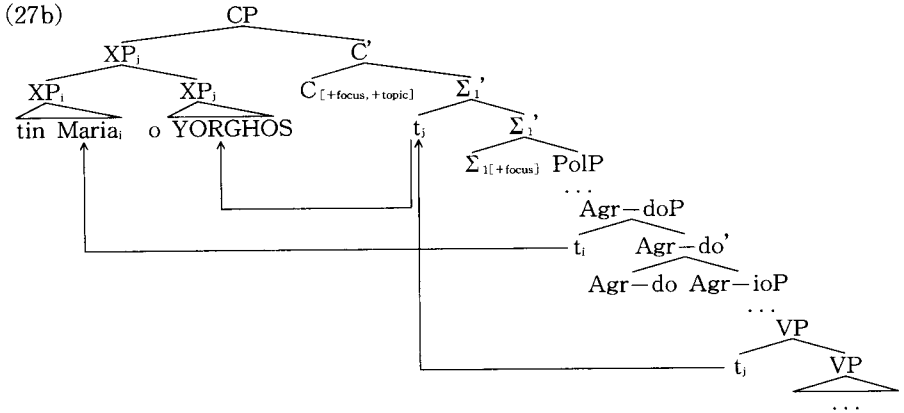
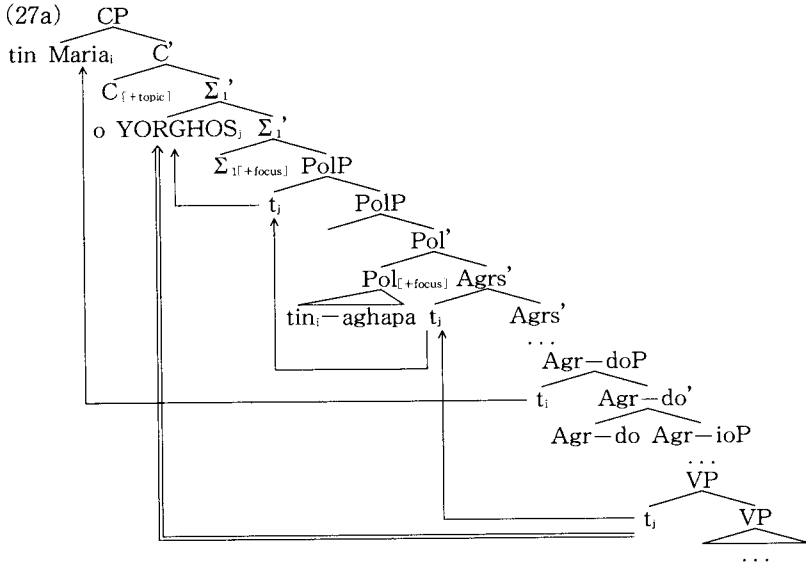
仮説 (24) との関連から、(6) のタイプの用例の適格性を再検討する（具体的に、(6a) に検討を加える）。(6a) に対する適格な派生と指定されるのは、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が上昇浸透し、素性 [+topic] が Pol に付与される場合のそれに限定される。この派生において、[+focus] NP (*to moro*) の移動経路 (UNION) と [+focus] NP (*o Yorghos*) の移動経路は完全包含関係を構成しない (cf. (20))。一方、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が上昇浸透し、素性 [+topic] が Σ_1 に付与される派生は ERM によって排除される（ Σ_1' に左方付加した位置に [+topic] NP (*o Yorghos*) と [+focus] NP (*to moro*) の中間痕跡が生起する）。同様に、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が上昇浸透し、素性 [+topic] が C に付与される派生は、PCT によって排除される（構造 (26)）。(26) において、[+focus] NP (*to moro*) の中間移動経路が UNION を形成しない点に留意されたい。つまり、[+focus] NP (*to moro*) の Spec(Agr-do) から Σ_1' に左方付加した位置

への移動経路が $[+topic]$ NP (*o Yorghos*) の移動経路に完全包含される (当該派生が不適格と予測される)。^{18) 19)}



ERM の観点から見た場合, (7a, b) それぞれに対応する二つの派生様式が想定可能である ((7a) に対応する派生構造 (27a, b) で考える)。一つは, Σ_1 に付与された素性 $[+focus]$ が下方浸透し, 素性 $[+topic]$ が C に付与される派生である (27a)。いま一つは, Σ_1 に付与された素性 $[+focus]$ が上昇浸透し, 素性 $[+topic]$ が C に付与される派生である (27b)。

(27a) において, $[+focus]$ NP (*o Yorghos*) の中間移動経路の UNION が形成される。この UNION と $[+topic]$ NP (*tin Maria*) の移動経路は完全包含関係を形成しない (ERM (ECP) の要請が満たされるため, 当該派生が適格と予測されることになる)。一方, (27b) は PCT によって排除される ($[+focus]$ NP に関する UNION が形成されない点に留意されたい)。それは, $[+focus]$ NP の Σ_1 の Checking Domain からその最終着地点までの経路が $[+topic]$ NP (*tin Maria*) の移動経路に完全包含されるためである (当該派生が不適格と予測される)。結果として, (7a) に対する適切な派生として, (27a) のみが指定されることになる。



5. 素性 [+focus] , [+wh] と [+topic] の相互作用 (S 移動)

5. 1. 定動詞に右方に生起する [+focus] XP と [+topic] XP

最初に, [+focus] XP と [+topic] NP が定動詞の右方に生起する用例を検討する。一般的に, この場合の [+focus] XP は, それが基底生成された位置にあると考えられている (Tsimplici 1995)。

(28) (Philippaki—Warburton 1985:(2a):(3a):(3b);p.120)

- a. *filise o Yanis ti MARIA*
'it is Maria that Yanis kissed'
- b. *filise ti Maria o YANIS*
'it is Yanis that kissed Maria'
- c. *filise ti MARIA, o Yanis*
'it is Maria that Yanis kissed'
- d. **filise ti MARIA o Yanis*
'it is Maria that Yanis kissed'

(29) (Philippaki—Warburton 1985:(8a):(12b):(11b):(7a))

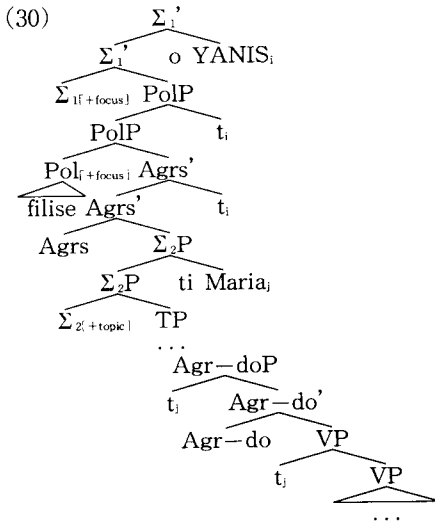
- a. *ti Maria_i ti_j—filise o YANIS*
- b. *ti_j—filise ti Maria_i o YANIS*
- c. *ti_j—filise o YANIS ti Maria_i*
- d. *o YANIS ti_j—filise ti Maria_i*
'(as for) Maria, it is Yanis that kissed her'

しかしながら、この基底生成説は (28c) における Subject NP (*o Yanis*) の直前における CI の義務的生起を説明できない。本稿では、(28c) における [+focus] NP (*ti Maria*) が Σ_1' に右方付加した位置へ S 移動していると考え (Σ_1 に付与された素性 [+focus] の下方浸透に伴い、当該 [+focus] NP が Agrs と PolP に右方付加した位置を経由する)。よって、主語 NP (*o Yanis*) が、基底生成された位置にとどまると考えることはできない (その場合には、(28a) が生成されることになる)。Topicalization の適用を受けた要素は、[+topic] 素性を付与された Pol あるいは Σ_1 の最大投射に右方 (左方) 付加した位置へ移動する (この場合、C に対する素性 [+topic] の付与が関与しない)。よって、[+topic] NP (*o Yorghos*) は、PolP あるいは Σ_1' に右方付加した位置へ移動する。この派生は、ERM によって排除される (PolP と Σ_1' に右方付加した位置に複数の要素が生起する)。結果として、当該主語 NP は、Right Dislocation (RD) の適用を受け、CP に右方付加した位置に基底生成されることになる (よって、当該 NP の直前に CI が生起する)。

(28a) は、主語 NP が基底生成された位置にとどまる派生、あるいは当該主語 NP が Σ_2P に右方 (左方) 付加した位置へ移動する派生と考えられる。双方の派生において、ERM と PCT が満たされる ([+focus] NP (*i Maria*) は、Agrs と Pol の Checking Domain を経由して、 Σ_1P に右方付加した位置へ移動している)。

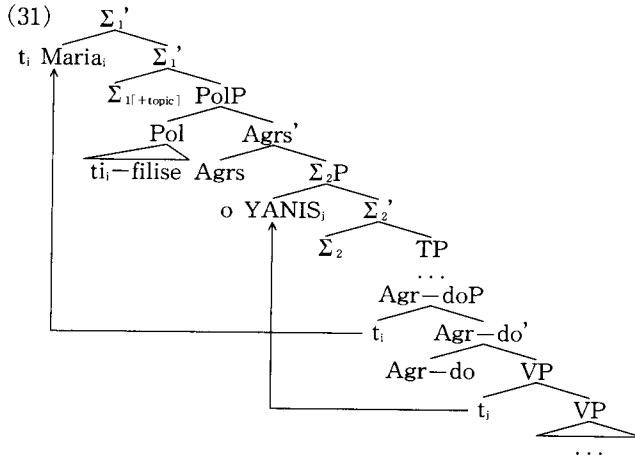
(28b) に対して、二つの派生が想定される (ERM の要請を満たす派生)。

DO NP (*ti Maria*) が基底生成された位置にとどまる派生と当該 DO NP が Topicalization の適用の結果, Σ_2P に右方 (左方) 付加した位置へ移動する派生 (30) である。前者の派生は, ERM と PCT を満たす。一方, 後者の派生 (30) は PCT によって排除される ([+topic] NP の移動経路が [+focus] NP (*o Yanis*) の経路 (UNION) に完全包含される。²⁰⁾

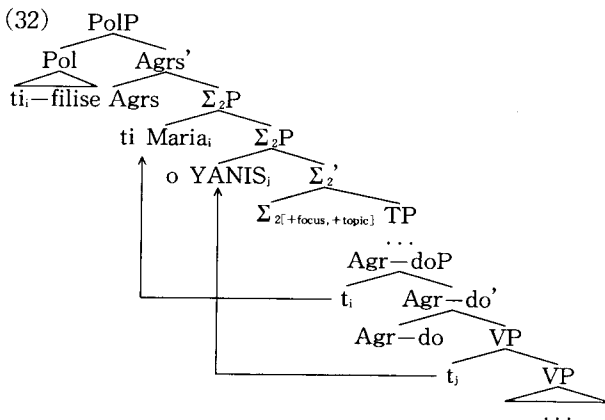


(29) において, DO NP (*ti Maria*) は Topicalization の適用を受けている (当該 DO NP に対応する Resumptive Clitic (*ti*) が生起する)。当該 DO NP の直前あるいは直後に CI が生起していない。(29a) に対して, 素性 [+topic] が Σ_1 に付与され, Σ_1 に付与された素性 [+focus] が下方浸透する派生を想定することはできない。この場合, 当該素性が上昇浸透する可能性はない (CP に右方 (左方) 付加した位置への移動による Topicalization が存在しない)。素性 [+topic] が Σ_1 に付与される派生は, [+focus] NP の Agrs の Checking Domain から Pol のそれへの移動経路が [+topic] NP の移動経路に完全包含される ([+focus] NP に関する UNION が形成されない)。素性 [+topic] が Pol に付与される派生もまた, PCT によって排除される。それは, [+focus] NP の UNION が [+topic] NP の移動経路を完全包含するためである。結果として, これまで設定された仮説群は, (29a) を不適格と予測する (問題点)。

この問題は, $\text{Spec}(\Sigma_2)$, あるいは Σ_2P に右方付加した位置へ移動する Focalization を想定することにより打開されるであろう。構造 (31) で示されるように, この派生は ERM と PCT の双方を満たす ([+focus] NP が Σ_2P に右方付加した位置へ移動する派生も, 同様に適格と予測される)。素性 [+topic] は, Σ_1 あるいは Pol に付与可能である。

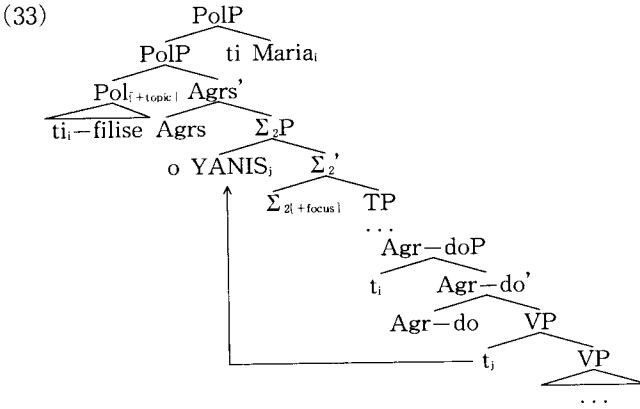


(29b) に対して, 以下の構造 (32) が想定される。



素性 [+topic] と [+focus] の双方が Σ_2 に付与される派生である。[+focus] NP (*o Yanis*) が Spec(Σ_2) へ移動し、[+topic] NP (*ti Maria*) が Σ_2P に左方付加した位置へ移動する。この派生は、ERM と PCT の双方を満たす。²¹⁾

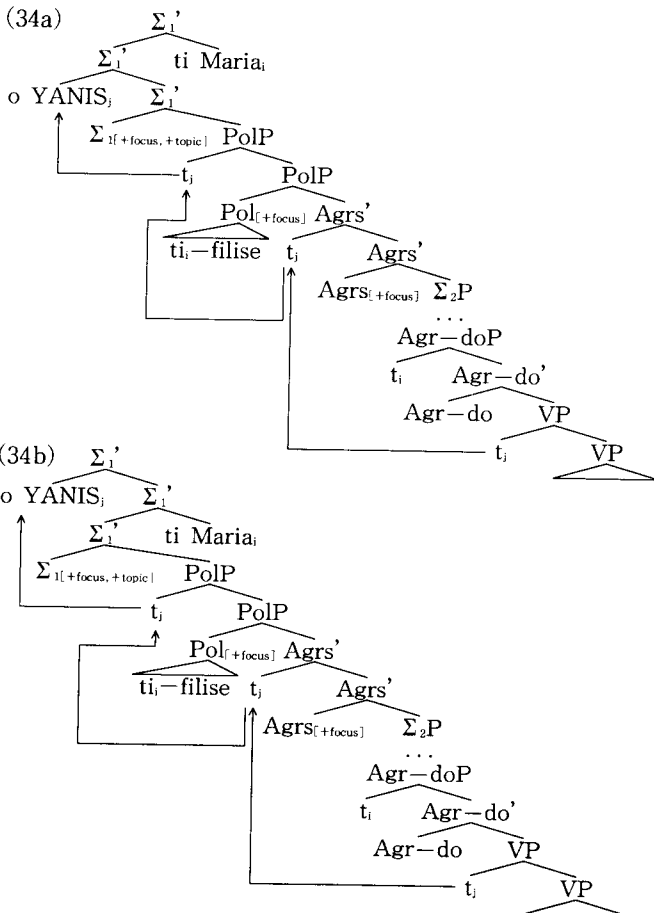
(29c) に対して、以下の構造 (33) が想定される。[+focus] NP は Spec(Σ_2) へ移動し、[+topic] NP は PolP あるいは Σ_1' に右方付加した位置へ移動する。この派生は、ERM と PCT の双方を満たす (適格と予測される)。²²⁾



(29d) は、問題を惹起する。これまで設定された仮説群は、(29d) を不適格と予測することになる。この場合、素性 [+focus] が Σ_2 に付与される派生は想定不可能である (Σ_1 に付与された素性 [+focus] の上昇、あるいは下方浸透が発動する)。
 [+topic] NP (*ti Maria*) が Σ_2P に右方 (左方) 付加した位置へ移動する派生は、PCT によって排除される (当該要素の移動経路が、[+focus] NP (*o Yanis*) の UNION によって完全包含される)。
 [+topic] NP が PolP に右方付加した位置へ移動する派生も、PCT によって排除される。同様に、[+topic] NP が Σ_1' に右方付加した位置へ移動し、素性 [+focus] の上昇浸透が発動する用例も、PCT によって排除される ([+topic] NP の移動経路が [+focus] NP の UNION に完全包含される。) 結果として、PCT が [+focus] NP (*o Yanis*) の UNION が形成される派生をすべて不適格と予測する。

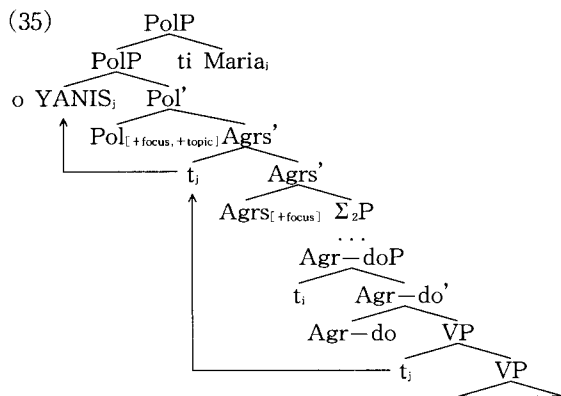
当該 [+focus] NP の UNION が形成されない派生として、以下の (34a,

b) が指定される。素性 [+topic] と [+focus] が共に Σ_1 に付与される派生である。[+focus] NP (*o Yanis*) は, Agrs と Pol の Checking Domain を経由して, Σ_1' に左方付加した位置へ移動する。[+topic] NP (*ti Maria*) は, 同じ Σ_1' に右方付加した位置へ移動す ((34b) は, 右方移動が左方移動に先立って適用されると考えた場合の派生)。 (34a, b) において, [+focus] NP の Agrs の Checking Domain から Pol のそれへの移動経路が [+topic] NP の移動経路に完全包含される。結果として, (34a, b) が共に不適格と予測されることになる。このように, (29d) に対する適切な派生が存在しないことになる (問題点)。



この問題は、素性 [+focus] が Pol に付与可能か否かの Parameter を設定することにより説明されると考えられる（これを、Parameter-C と呼ぶ）。[+Parameter-C] の方言において、Pol に付与された素性が Agrs へ下方浸透すると考える（この場合、素性 [+focus] の上昇浸透が存在しないと想定する）。

(29d) の適格性は、以下の構造 (35) によって説明される。素性 [+topic] が Pol あるいは Σ_1 に付与される。Pol に付与された素性 [+focus] が、順次 Agrs へ下方浸透する。²³⁾



[+focus] NP (*o Yanis*) の最終 Checking Domain (Spec(Pol)) と [+topic] NP (*ti Maria*) の Checking Domain が異なるため、当該 [+focus] NP の中間移動経路が UNION を形成する。この UNION と [+topic] NP の移動経路は完全包含関係を構成しない（当該派生が、適格と予測されることになる）。²⁴⁾

註

- 0) 本稿の匿名 Reviewer から、多くの有益な指摘がなされた。ここに、謝意を表する次第です。特に、本稿で用いられる用語「方言」の用法が不明確との指摘を受けた。本稿では、「方言」を地理的・社会的方言と個人言語 (idiolect) を包含する概念として用いることにする (cf. fn. (10))。
- 1) Focalization の適用を受けた要素 ([+focus] 要素) は大文字で示される。
- 2) 後述するように、 Σ_1 の最大投射として Σ_1' が指定される。ERM の観点から、Agrs の最大投射として Agrs' あるいは AgrsP が指定可能である（後者の場合、Spec (Agrs) に pro が基底生成されると考える必要がある。よって、Spec (Agrs) に要素が

移動する可能性が排除される)。本稿では仮に、Agrs の最大投射として Agrs' を想定する。Pol の最大投射も問題となる。本稿では、その最大投射として PolP を想定する。更に、この Spec(Pol) 位置へ移動可能な要素として、Negative Polarity Item (NPI) と [+focus] XP を想定する ([+wh] 要素が当該 Spec 位置へ移動することはないと前提する)。

- 3) Laka (1990, 93) は、C と Agrs の間に Negative Marker (*no*) と Affirmative Marker (*si*) が生成されるゼロ範疇 (Σ) を想定する (この Σ は、本稿の Polarity (Pol) に対応する)。定動詞は、Agrs から Σ (本稿の Pol) へ移動する (ibid.)。加えて、NPI (例えば、*nunca* (*never*)) は、Spec(Σ) へ移動する。
- 4) この効果を得るため、Agrs の指標と Pol に左方付加した位置へ移動する Marker の指標が最上位の Pol 位置へ上昇浸透すると考える必要がある。更に、主要部移動に課される先行詞統率における指標が Non-Distinctness によって規定されると想定する必要がある。これらの前提により、最上位にある Pol は、痕跡 (t_i , t_j) を先行詞統率可能となる (Belletti 1990a, b)。
- 5) 前述のように、スペイン語に対する CP 構造 (11)(=13) を想定する根拠 (例えば、Focus Marker (*si que*), Negative/Affirmative Marker (*no*, *si*)) が存在する。MG の CP 構造としての (11)(=13) に対する形態論的な根拠が見出されるであろうか。この根拠として、Neg 要素、Clitic, Future Marker (*tha*), Subjunctive Marker (*na*) と定動詞の位置関係を示す (i)–(iv) を説明する論法が挙げられるであろう。

- (i) Neg(*dhen*) + *tha* + Clitic + V [+Finite]
- (ii) *na* + Neg(*mi(n)*) + Clitic + V [+Finite]
- (iii) Neg(*mi(n)*) + V [Gerund] + Clitic
- (iv) V [Imperative] + Clitic

- (v-a) Neg (*dhen*, *mi(n)*) は、 Σ_2 に基底生成される。
- (v-b) Future Marker (*tha*) は、Pol に基底生成される。
- (v-c) Subjunctive Marker (*na*) は、 Σ_1 に基底生成される。

これに関する考察は、Ishioka (forthcoming) においてなされる。当該論文において、同一の MG の語順事象を取り扱う Rivero (1994) と Drachman (1995) の説明方法に検討が加えられ、その問題点が指摘される。(i)–(iv) の問題は、Cliticization の発動プロセスと密接に関係するものである。よって、Cliticization の引き金 (Trigger) そのものの画定がなされ、上の問題を克服すると思われる新たな論法が提示される (並行するスペイン語における Cliticization と Neg (*no*) に関する論考が 石岡(1997) に見られる)。

- 6) 以下の (1) と (ii) は、本稿で採用される連言的適正統率 (空範疇原理 (Empty Category Principle (ECP))) と先行詞統率の定義である ((iii) と (iv) は、M 統御と主要部統率の定義)。

- (i) X is properly governed iff (a) and (b):
 - (a) X is canonically head-governed (Licensing)
 - (b) X is antecedent-governed (Identification)

- (ii) X antecedent-governs Y iff
 - (a) X and Y are coindexed

- (b) $X \text{ m-commands } Y$
- (c) no barrier intervenes
- (d) Extended Relativized Minimality (ERM) is respected.

(iii) $X \text{ m-commands } Y$ iff X does not dominate Y and every maximal projection that dominates X dominates Y .

- (iv) $X \text{ head-governs } Y$ iff
 - (A) a. X is a head
 - b. $X \text{ m-commands } Y$
 - (B) $X = \{[\pm V, \pm N], C, \Sigma_1, \text{Pol}, \text{Agrs}, \dots\}$
 - (C) a. no barrier intervenes

b. Extended Relativized Minimality (ERM) is respected

7) X^0 範疇の Checking Domain として、当該 X^0 に (左方) 付加した位置 (あるいは、その SS 位置) が指定される (主要部移動の場合)。最大範疇の移動に対しては、 X^0 の最大投射に付加 (左方、あるいは右方) した位置と $\text{Spec}(X)$ が指定される (Toribio 1993, Chomsky 1992)。この前提の下では、 $[+wh]$ XP が Σ_1' に付加した位置においてその移動を停止することになる (Root Context において)。Embedded (Embd.) Context では、Matrix V がその Sister 要素である CP の主要部に素性 $[+wh]$ を付与する (当該素性は、 Σ_1 と Pol を経由して Agrs まで下方浸透する)。よって、Emd. CP 内部では、 $[+wh]$ XP が Embd.C まで移動する。移動はすべて、同一方向である。例えば、左方移動した要素が次の移動段階において右方移動することはない。Contreras (1991) では、 $[+wh]$ XP の移動用例が異なる原理 (Closed Domain Condition (CDC)) によって説明される (CDC の詳細に関しては、Contreras (1989, 91) を参照されたい)。

8) Left Dislocation (LD) の適用を受けた要素は、CP に左方付加した位置に基底生成される (当該要素の直後に Comma Intonation (CI) が生起する)。Right Dislocation の適用を受けた要素は、CP に右方付加した位置に基底生成される (当該要素の直前に CI が生起する)。

一方で、最大投射 (Σ_1' , PolP あるいは Σ_2P) に右方 (左方) 付加した位置へ移動することによって発動する Topicalization が存在する (類似の論法が Zubizarreta (1994) に観察される)。

9) (17a) と (18a) において、主語 NP の要素と PolP に左方付加した位置にある中間痕跡の相対位置が逆転した派生もまた、ECP に抵触する。主語 NP が Σ_1' に左方付加した位置へ移動する派生もまた、ECP に抵触する。

10) 仮説 (19) の適用・不適用を Parameter-A と呼ぶ。

Alexiadou (p.c.) は、例えば本稿の (3a) と (6a) の相違が方言上の相違 (dialectal variation) であると指摘する。Philippaki-Warbuton (p.c.) は、本稿の (8a) に並行する用例 (ia) における $[+topic]$ DO NP (*tin Maria*) の直後における Comma Intonation が生起しない用例を適格と判断する (当該 DO NP の直後の Comma Intonation の生起する用例 (ib) の認容度が更に上昇すると指摘する)。

一方、Philippaki-Warbuton (1985:p.118) は、(ib) の DO NP (*tin Maria*) の直後において Comma Intonation が要求されると言う。この判断の揺れは、この場合の Comma Intonation の生起が個人言語 (idiolect) の領域に属すると考えられる。

- (i) a. tin Maria, o YORGHOS tin_i-aghapa (7a)
 b. ti Maria, o YORGHOS ti_i-filise (8a)

本稿の(75)を適格と判断する話者と不適格と判断する話者が存在する。更なる調査が必要であるが、この相違も個人言語(idiolect)に属すと考えられる。

- 11) 本稿筆者による調査の限りにおいて、(4a)が適格と判断される方言は存在しない(以下の(i)で観察されるように、(4a)のタイプが周遍的(???)と判断される方言が存在する)。

- (i) ???pjon o Yanis sinandise? (Horrocks 1982:(40))
 'whom did Yanis meet?'

石岡(1996c)のReviewerは、上の(i)を適格と判断する。この判断が妥当する場合、 Σ_1 に付与された素性[+wh]の下方浸透が発動しない方言の存在を想定する必要があると考えられる(素性[+wh]の上昇浸透が存在しないと前提した場合)。それに対して、(i)の判断(???)は当該素性の下方浸透停止のStratgeyが周遍的に適用されると考える必要があろう(詳細に渡る検討は稿を改める)。

(ii)で観察されるように、Adjunct[+wh]要素が移動する用例における[SV]語順が許容される。(ii)の適格性は、当該Adjunct[+wh]要素が Σ_1' に右方付加した位置に生成されると想定することにより説明可能である(石岡(1996b)を参照されたい)。

- (ii) yati o Petros efige? (Drachman 1995:(43a))
 'why did Petros leave?'

- 12) MGにおいて、LD(RD)、あるいはTopicalizationの適用を受けたXP(Accusative or Dative)に対応するResumptive Cliticが生起する。主語NPに対応するResumptive Cliticが出現しない(Resumptive Cliticとして機能する主語Cliticが存在しない)。
- 13) (8b)を説明する論法は、[+topic]要素の位置関係が逆転した用例を適格と予測する。この予測は、(i)によって例証される(定動詞に対する[+focus]付与は、Default Focalizationであり、定動詞以外の最大範疇にLD(RD)あるいはTopicalizationが適用された場合に限り発動すると考える)。

- (i) o Yanis, ti Maria, ti_i-FILISE (Philippaki-Warburton 1985:(10a))
 'Maria, Yanis KISSED her'

定動詞にPresentational Focus Stressが付与された場合、定動詞はPol位置にとどまる。よって、素性[+topic]がPolあるいは Σ_1 に付与されることになる。この派生もまた、ECPによって排除される。

- 14) これを、S-Absorptionと呼ぶことにする。Spec(C)位置に生起するXP範疇それ自体に左方付加した位置へ最大範疇(YP)の移動は、ERM(ECP)を満たすと考えられる。結果として、S移動する最大範疇に対するChecking Domainとして、Spec(X)に生起する左方付加した位置を追加する必要がある(後述する仮説(24)との関連から、Checking Domain(Spec(X))とChecking Domain(Spec(X))にある要素それ自体に左方付加した位置)が同一のChecking Domainであると考えられる。後述するように、LF移動要素に対して、最大範疇(XP, X')に左方付加した位置に生起する

要素それ自体に左方付加した位置も指定される。

- 15) (7b)における定動詞に Presentational Focus Stress が付与される派生も、同様の論法によって適格と予測される)。
- 16) ϕ -Feature に関しては、V の移動を受けた Agrs の複合体が基底生成された位置にある主語 NP を統率することにより付与 (Checking) されと考えられる (Toribio 1993)。あるいは、Spec(Agrs) に基底生成された pro と Spec-Head Agreement によって Checking されとも考えられる (詳細な検討は稿を改める)。
- 17) 定動詞に付与される Stress (Presentational Focus or Contrastive Focus) に関係なく、仮説 (23) は (22a) を不適格と予測する ((21c) を適格と予測する)。
- 18) 前述のように、 Σ_1 に付与された素性 [+focus] が下方浸透し、素性 [+topic] が Pol あるいは Σ_1 に付与される派生は、ERM によって排除される。
- 19) CP に左方 (右方) 付加した位置へ移動することによって発動する Focalization は存在しないと想定する。
- 20) 素性 ([+focus], [+wh] あるいは [+topic]) が付与されない DO NP (IO NP) は、Spec (Agr-do) (Spec (Agr-io)) へ移動する必要がないと考える (よって、この場合、DO NP (IO NP) はそれが基底生成された位置にとどまると考えられる)。(30) の派生構造は、DO NP (IO NP) が Σ_2P に左方 (右方) 付加した位置へ移動する場合、当該 DO NP (IO NP) に対応する Resumptive Clitic の生起が随意的と想定した場合に可能である。
- 21) 後述するように、右方移動が左方移動に先立って適用されると想定される。よって、[+focus] NP (*o Yanis*) が Σ_2P に右方付加した位置へ移動する派生も適格と予測される。
- 22) 右方移動が左方移動に先立って適用されると想定した場合、[+topic] NP (*ti Maria*) が Σ_2P に右方付加した位置へ移動する派生も適格と予測される。
- 23) 素性 [+topic] が Σ_1 に付与される派生も、適格と予測される。
- 24) 後述するように、Schneider-Zioga (1994) と Alexiadou (p.c.) が属す方言は、[+Paramater-C] である (Embd. Context において)。

参考文献

- Agouraki, G. (1990) "On the Projection of Maximal Categories." *UCL Working Papers in Linguistics* 2, 182-200.
- Alexiadou, A. (1996) "Aspectual Restrictions on Word Order." *Folia Linguistica* XXX/1-2, 35-46.
- Arnaiz, A. (1992). "On Word Order in Wh-Questions in Spanish." *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
- Belletti, A. (1990a) "On the Morphosyntactic Nature of the Sequence "Aux-Past Participle" in Italian." Mascaró, J. and M. Nespó (eds.) *Grammar in Progress*. Foris, Dordrecht.
- Belletti, A. (1990b). *Generalized Verb Movement*. Rosenberg & Selier, Torino.
- Bosque, I. (1994). "La Negación y el Principio de las Categorías Vacías." Demonte, V. (ed.) *Gramática del Español*, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, El Colegio de México.
- Brody, M. (1990). "Some Remarks on the Focus Field in Hungarian." *UCL Working Papers in Linguistics* 2, 201-225. University College London.
- Brody, M. (1995). *Lexico-Logical Form: A Radically Minimalist Theory*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.

- Brucart, J. M. (1993). "Sobre la estructura de SCOMP en español." Viana, A. (ed.) *Sintaxi, Teoria i Perspectives*, Pagès Editors, Lleida.
- Campos, H. R. (1986). *Inflectional Elements in Romance*. Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Campos, H. R. and M. Zampini (1990). "Focalization Strategies in Spanish." *Probus* 2.1, 47-64.
- Chomsky, N. (1986). *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, N. (1989) "Some Notes on the Economy of Derivation and Representation." *MIT Working Papers in Linguistics* 10, 43-75.
- Chomsky, N. (1992). "A Minimalist Program for Linguistic Theory." *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Cinque, G. (1990). *Types of A'-Dependencies*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, H. (1989). "Closed Domains." *Probus* 1-2, 163-180.
- Contreras, H. (1991). "On the Positions of Subjects." Rothstein, S. (ed.) *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing*. Academic Press, London.
- Contreras, H. (1992). "On Resumptive Pronouns." Campos, H. and F. Martínez-Gil (eds.) *Current Studies in Spanish Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Drachman, G. (1995). "Greek Phrase Structure and the Order of Inflectional Morphemes." Winter, W. (ed.) *On Languages and Language, the Presidential Addresses of the 1991 Meeting of the Societas Linguistica Europea*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York.
- Fontana, Josep M. (1993). *Phrase Structure and the Syntax of Clitics in the History of Spanish*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Fukui, N. and M. Speas (1986). "Specifiers and Projections." *MIT Working Papers in Linguistics* 8, 128-172.
- Goodall, G. (1992). "On the Status of SPEC of IP." *WCCFL* 10, 175-182.
- Goodall, G. (1993). "Spec of IP and Spec of CP in Spanish Wh-Questions." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Hernanz, Ma. Lluïsa and José Ma. Brucart (1987). *La Sintaxis*. Editorial Crítica, Barcelona.
- Higginbotham, J. and R. May (1981). "Questions, Quantifiers and Crossing." *The Linguistic Review* 1, 41-79.
- Horrocks, J. (1982). "The Order of Constituents in Modern Greek." Gazdar, G., J. Pullum and E. Klein (eds.) *Order, Concord and Constituency*. Foris, Dordrecht.
- Joseph, B. D. and I. Philippaki-Warbuton (1987). *Modern Greek*. Groom Helm, London.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The Position of Subjects." *Lingua* 85, 211-258.
- May, R. (1985). *Logical Form Its Structure and Derivation*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Laka, I. (1990). *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*. Ph. D. dissertation, MIT.

- Laka, I. (1993). "Negative Fronting in Romance: Movement to Σ ." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Mackridge, P. (1987). *The Modern Greek Language, A Descriptive Analysis of Standard Modern Greek*. Oxford University Press, Oxford/New York.
- Mendikoetxea, A. (1993). "Los Clíticos como Categorías Subléticas de Concordancia." Fernández Soriano, O. (ed.) *Los pronombres átonos*. Taurus, Madrid.
- Philippaki-Warbuton, I. (1985). "Word Order in Modern Greek." *Transactions of the Philological Society* 2, 113-143.
- Puskás, G. (1992). "The Wh-Criterion in Hungarian." *Rivista di Grammatica Generativa* 17, 141-186.
- Rivero, M. -L. (1987). "Barriers and the Null Subject Parameter in Modern Greek." *NELS* 18, 412-425.
- Rivero, M. -L. (1992). "Adverb Incorporation and the Syntax of Adverbs in Modern Greek." *Linguistics and Philosophy* 15, 289-331.
- Rivero, M. -L. (1994). "Clause Structure and V-Movement in the Languages of the Balkans." *Natural Language and Linguistic Theory* 12, 63-120.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Schneider-Zioga, P. (1994). *The Syntax of Clitic Doubling in Modern Greek*. Ph. D. dissertation, University of Southern California.
- Stevens, A. (1990). "The Structure of Negative Quantified Sentences in Spanish." *CLS* 27, 309-318.
- Srner, M. (1994). "V-Movement and the Licensing of Argumental Wh-phrases in Spanish." *Natural Language and Linguistic Theory* 12, 335-372.
- Toribio, A. J. (1993). *Parametric Variation in the Licensing of Nominals*. Ph. D. dissertation, Cornell University.
- Torrego, E. (1984). "On Inversion in Spanish and Some of Its Effects." *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Tsimpli, I. M. (1990). "The Clause Structure and Word Order of Modern Greek." *UCL Working Papers in Linguistics* 2, 226-255, University College London.
- Tsimpli, I. M. (1995). "Focusing in Modern Greek." Kiss, E. (ed.) *Discourse Configurational Languages*. Oxford University Press, Oxford/New York.
- Zagona, K. (1988). *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Kluwer, Dordrecht.
- Zanuttini, R. (1991). *Syntactic Properties of Sentential Negation. A Comparative Study of Romance Languages*. Ph. D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Zanuttini, R. (1994). "Re-Examining Negative Clauses." Cinque, G., J. Koster, J-Y. Pollock, L. Rizzi, and R. Zanuttini (eds.) *Paths Towards Universal Grammar*, Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Zubizarreta, M. L. (1994). "El Orden de Palabras en Español y el Caso Nominativo." Demonte, V. (ed.) *Gramática del Español*, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, El Colegio de México.

- 石岡精三 (1995a). 「カタロニア語の Wh 要素移動における方言上の差異について－Topicalization との関連から－」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』 9, 1-34.
- 石岡精三 (1995b). 「スペイン語における Wh 島内部からの [+top] 要素の移動について－Wh 要素移動との比較において－」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』 9, 35-68.
- 石岡精三 (1996a). 「スペイン語における Wh 要素移動－Focalization, Topicalization と Left Dislocation との比較から－その1」 『ロマンス語研究』 29.
- 石岡精三 (1996b). 「現代ギリシャ語における Focalization－Wh－Movement と LD (RD) との関連から－ その1」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』 10, 31-56.
- 石岡精三 (1996c). 「現代ギリシャ語における Focalization－Wh－Movement と LD (RD) との関連から－ その2」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』 10, 57-82.
- 石岡精三 (1997). 「スペイン語における Wh 要素移動－Focalization, Topicalization と Left Dislocation との比較から－その2」 『ロマンス語研究』 30.
- Ishioka, S. (forthcoming). "Greek CP in Relation to Cliticization, Neg Movement, the Future Marker *tha*, and the Subjunctive Marker *na*."